

Into my Packet



後藤滋樹の

新・社会楽

後藤滋樹 (goto@ntt-20.ntt.jp)
日本電信電話株式会社
ソフトウェア研究所

第8回「電子喧嘩はしつこい」

【日本語が使エマスカ】

米国のあるジャーナリストから筆者のもとへ一通の電子メールが届いた。彼は日本のインターネットのことを調べているという。メールの後半には一連の質問が並んでいた。その質問を見ると、どうやら向こうは「インターネットでは英語しか使えない」と信じており「日本でインターネットが十分に普及していない理由は日本語が使えないからだ」と誤解している節がある。

そこで私はウィンドウズ3.1Jやら漢字Talk 7.5の説明をする羽目に陥ったのだが、冷静に考えてみれば、その記者が米国で使用しているパソコンでは英語しか使えないのだらう。その環境で電子メールやWWWを楽しんでいるとすれば「この目の前にあるものがインターネットだ」と考えるのは至極当然である。

日本語や漢字の説明をするために彼と何度かメールのやりとりをした。その中で割に説得力があったのは、昔のJUNETの時代に日本語が導入された際のグラフである（これをFAXで彼に送った）。当時の事情を分析した野島氏によると、1986年12月以降は、fjニュースグループの半分以上の投稿は日本語で書かれるようになったのであるが、グラフの#1の点ではユーザーの75%が漢字を読める環境にあった。#2では60%、#3では75%、#4では95%、#5では99%という具合である。この日本語環境の整備とニュースへの投稿の数の増加とは明らかに関係がある。

【喧嘩はあっさりしたほうが】

当時のことを思い出すと、私自身も日本語が使えるようになって電子メールの読み書きが楽になった。それまでは国内でも英語またはローマ字を使っていたのだから大進歩である。ニュースも盛んになった。それと同時に電子メールやニュースにおける喧嘩もよく見かけるようになった。まあ世の中では良いことも悪いことも起こる。電子メディアも喧嘩に使えるのだから大したものだ、と私は楽観していたが、冷静に観測をしていた上記の野島氏は、電子メールやニュースの上で起こる喧嘩のほうが、実社会での喧嘩よりも「しつこい」という指摘をした。これは米国での観測でも同様な指摘があるという。

私自身も電子喧嘩の当事者になったことがあるのだが、どうも普通の喧嘩とは違う面がある。

(1) 口喧嘩で馬鹿とかアホとかいわれても翌日には忘れてしまう。しかし電子メディアはいつまでも記憶している。相手から無礼な電子メールが届いたので、カッと反論のメールを書いたものの「まあ一晩寝て落ち着いてから明日送ろう」と思う。そ

れで翌日になって相手のメールを読み直すと、また興奮してしまって「昨日の反論では言い足りない」と激しい表現に変えてしまうことがあった。

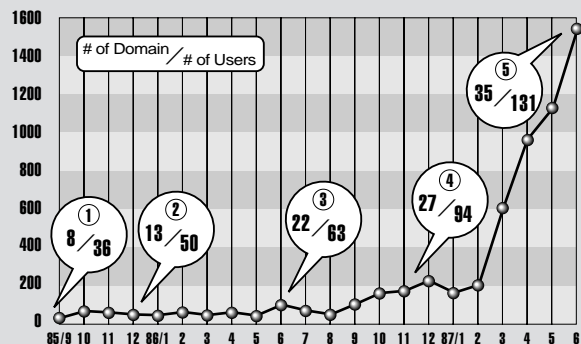
(2) 喧嘩の最中によく起こるパターンは「おまえが以前に言ったことと違うではないか」「いやそんなことは言わない」という会話である。口喧嘩では言わないと主張すれば済む場合でも、電子喧嘩では相手の台詞を克明に引用できる。今と昔の発言の矛盾を容易に編集によって浮き出すこともできる。喧嘩が強烈になってしまう。

このように私自身の個人的な体験では専ら記録と編集の容易なことを認識したが、心理学者は別の側面からも分析していた。

【細いチャンネル】

人間には適応能力が備わっている。たとえば電話の相手の声が小さいと感じると、自動的に自分の声を大きくする。これは通信のチャンネルが細い（電話が遠い）という状況に適応しているのである。電子メールやニュースは普通に面と向かっているのに比べれば、やはり細いチャンネルである。これを人間は察知して「自動的に」大きい声（つまり激しい表現）になるという説明である。

この説明によれば、人間は電子メールやニュースに既に適応しているとも言える。また太いチャンネルを与えるのが、いわゆるマルチメディアであるとすれば、それは「穏やかな喧嘩」への道を拓くものだという期待もできそうである。もちろんマルチメディア喧嘩という新しい範疇が誕生する可能性も残されてはいるのだが。



○ fjニュースグループにポストされた記事の数

[出典] 野島久雄、二上俊嗣「JUNETにおける利用環境の変化」
情報処理学会第35回（昭和62年後期）全国大会 3V-10, 1987.



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp